

高岡 宣 善 君

学会誌の昨年(昭和39年)の4月号に、ドイツの工業教育に関する高岡さんの一文がある。適確な分析力と緻密な文章構成をもった資料として、口うるさき?編集委員の間でも、なかなか好評だったのでご記憶の方も多かろう。今回の入賞論文も、土木工学の内容が拡大するにつれて教育上にも起こりつつある問題、つまり“土木の各分野を総合する一つの原理”といった哲学的なものを突き詰めたかったのが応募の動機という。

宝くじや年賀葉書にも当たった経験がなく、賞などというものは義務教育終了以来ほとんど無縁だったので、大変嬉しいと、受賞祝賀会でごやかに語る高岡さんの顔は、お祝いのビールで真っ赤だ。寝ている間にベットごと学生寮内の臨時ビヤホールに運ばれて飲まされた…といったビールの国ドイツで2年間も鍛えられたのにさっぱり強くなれないと嘆く。

38年の7月から40年の8月までシュットガルト工科大学でLeonhard教授、Pelikan教授のもとで構造工学を学び、理論と設計施工上の結びつきを合理的に教え込まれたこの人にとって、話題は何となく留学生活の思い出につながってゆく。月400マルクの生活は決して楽ではなかったらしいが、寮費が月50~60マルクだったこと、通訳のアルバイト等が結構あったこと等で、美術、建築、音楽等に極力接してきたし、ヨーロッパ各地への旅行も時間と金の許すかぎり試みてきたそうだから、独身の高岡青年にとって誠に精神的には王者の暮らしてあったらしい。世界中から集まった様々な留学生に接するうち、“人間は民族、身分等にかかわらずみな平等である”ということを痛切に感じたという。美しく豊かな生活環境を造り出す使命を負わされている土木技術者の任務を達成するためには、広い視野と自然および人間に対する深い理解心をもつべきである……誠に当然な高岡さんの主張であるが、わが国土木界の現状を眺めた場合むずかしい問題が山積しているようだ。今春結婚のご予定とか、ドイツ婦人はデリカシーがなくて……と笑われたから、心暖かきベターハーフを得られたに違いない。

【略歴】 県立香川高等学校で農業土木を学び、昭和34年徳島大学工学部土木工学科を卒業、京都大学大学院へ進み、修士、博士課程を経て38年7月~40年8月までシュットガルト工科大学へ留学、現在京都大学助教授、工業教育養成所勤務、29才。現住所 京都市左京区下鴨膳部町105

横 山 義 雄 君

工学部へ入ったのではなくてボート部へ入った、と評されたほどのスポーツマンで、在学中は名マネージャーとしてボート部を率い、当時食糧難のおりから米集めに勇名を馳せ、東京オリンピックでは役員(一人)として選手団の面倒を実によく見たという。

何事も徹底するファイトを買われ、目下会社から留学を命ぜられ、一家を上げてアメリカに滞在中で、受賞式には父上の忠雄氏が出席された。

男2人、女4人という子福者の忠雄氏は元農林省蚕糸試験場長を勤められ、今も大日本蚕糸科学研究所におられる科学者で農学博士、豊かな話題をもたれる紳士である。長男である義雄氏が“モノを書いて賞を貰った”ということにびっくりされたそうで、先輩や同僚のお蔭としきりに恐縮されるが、二、三年前に学会の大学土木教育研究委員会の幹事をつとめ、複雑な建設業界における技術者の流動分布状況を精力的に調べまわり、しっかりとした文章にまとめた(注:土木技術者の活躍と大学土木教育)手腕は高く評価されている。

小さい時から不思議に人を使うことがうまかったというが、その辺が後年の横山さんをして自主的に土木を選ばせ、建設業へ進ませた素因であるようだ。横山さんのアメリカ留学の研究テーマは建設工事管理(Construction Management)の問題というが、持前の馬力と、それに加えて英語の達人な奥さんの多大な援助で多くの成果を持帰ることだろう。

今後ますます進展する土木技術に即応し、品質、工期、経済等すべてを満足しうる構造物を造り出せる施工技術者の養成は、教育者側、受入れ側、土木学会等が協力してあい路を打開せよ……と説き、教育制度の開発を進めねばならない……としてアメリカから論文をわざわざ送ってきたこの人の論には、傾聴すべき多くのものがあるようである。おっとりとした風貌、どっしりとした身体つきでユーモアに富み、新しい土木技術者の一つの代表的なタイプともいえそうである。

【略歴】 都立西高等学校卒業後、東京大学工学部土木工学科へ進み昭和30年卒業、大林組に入社、地下鉄、ダム、鉄道工事等の現場を経て、現在土木本部技術課に所属。昭和40年9月よりアメリカ合衆国Stanford大学へ留学中、35才。現住所 108-B. Escondido Village, Stanford, Calif., U.S.A.

<文責 事務局編集課>